

經濟研究

創刊號

January 1950

Vol. 1 No. 1

資本理論の二つの側面

中山 伊知郎

I 問題 II 二つの資本理論 III 各々の特質 IV 展望

I 問題

資本の理論はその根本的な重要さにも拘らず今日尚依然として混迷の中にある。最大の理由はいうところの資本の理論が實は經濟理論そのものであって部分理論ではないということにあるであろう。マルクスの資本論やポエームの資本學説がその實、經濟理論の全體に外ならぬことは知る人ぞ知る。この意味においては資本理論の混迷は同時に現代の經濟理論一般の混迷といわねばならぬ。しかし今日の經濟學において資本理論がこのような地位にあることにはいま一つの理由を附加せねばならぬ。それは資本理論が本質的に動態理論たることである。動態を如何に規定するかについては多くの異論があるであろう。しかしこれを如何に規定しようとも資本の蓄積や作用や、貯蓄や投資の運動がそれ自體發展の問題をふくむことは否定し得ない。動態の理論化はもともと發展の過程をとらえるためのものであった。とすれば動態の理論をめぐる經濟學の苦闘はそのまま資本の理論の苦闘を意味するものといわねばならぬ。

資本理論のこのような状態は現象的にも種々の形で現われている。第一に曾て資本の理論という

名稱の下に正面からとり組まれていた基本的な問題が理論體系の中から影を消そうとしている。古典學派の中にはあって近代の經濟學の中では影をうすくしているもの——ハロッドはこれをリカルドーの場合について巧みに指摘している。曰く「リカルドーの原理の序文には有名な文句“to determine the laws that regulate this distribution is the principal problem of Political Economy”がある。現代の讀者はこの文句を文法通りにうけとってそれがいまわれわれの分配の靜態法則と呼ぶものに關係すると考えるに相違ない。しかしこの文句はそれに先立つ文句“In different stages of society the proportion of the whole produce of the earth which will be allotted to these classes under the name of rent, profit and wages—will be essentially different.”の光の下で考えられねばならぬ。この書を読んだ後に右の序文に立ち歸ったとしたら、人は必ず最初に引用した一節を後の一節によって解釋せざるを得ないであろう。分配を一つの動態的意味において解釋することこれである。あるいは經濟學者の第一の仕事が一時點における生産物の要素への分屬の態様の決定にあらずして、

如何に進歩が生産物の要素への分属を次々にかえて行くかの決定にあることこれである。』¹⁾ 古典學派には靜態の問題と動態の問題とがあった。近代の經濟學には靜態の問題が著しく精緻になったと同時に動態の問題が缺けている、というのがハロッドの主張であろう。言葉は誇張されているがこのような傾向のあることは明白である。

第二の事實は曾て資本の理論の問題とせられたものが今日では利子論や利潤論や景氣論の中に分割されているということである。例えばエリスが編するところの「現代經濟學總觀」(1948年)を見よ。十三に分れた主題の何處にも資本の理論はそれ自體として姿を示さず、その第一章「價值と分配」の中には利子論の一部分に資本理論の發達についての言及があるに止まる。²⁾ このこと自體は勿論非難するには當らない。若し資本の理論が冒頭にのべたように經濟の理論に外ならぬとすれば、進歩した今日の經濟學がこれを分科的にとりあつかうことは毫も不思議とするに足りぬとされるであろう。生産の要素としての資本、分配の要因としての資本、貨幣としての資本、労働に對抗するものとしての資本、發展の動力としての資本、従つて又經濟體制の重心としての資本、およそこれらの多面的な意味をもつところの資本を唯一つのものとしてとり上げる舊い理論の態度には理論として未完成なものがあつたに相違ない。その限りにおいていまこれらの意味をそれぞれの部分理論に分解して考えることはたしかに科學の一つの進歩と見なし得るであろう。けれどもこのような進歩は資本の理論の統一的な存在を否定するだけの根據をもつか。その仕方の中には發展の問題を分解して遂に發展の本質を見失うのと殆んど同様な危険が考えられないであろうか。

これは資本理論の現状を示すただ二つの例である。しかしこの僅かな例示の中にわれわれはすでに資本理論の理論としての困難が何處にあるかを察知することが出来る。この混迷は本質的には經

濟一般の理論の複雑さに基因するものであり、その困難は直接的には動態理論の未完成に由來するものである。一朝にしてこれを打開することは望み難い。すべては動態理論建設の本筋に従つて解かれねばならぬであろう。ただすでに問題の所在を以上のように見て來れば、その解決の方向が何處にあるべきかは自ら明かになる。資本の理論の中には發展の問題が正しく位置づけられねばならぬと同時に、今日の精緻な理論の體系において分化にすぎたものに対しては改めて統一性が回復せられねばならぬ。われわれが資本の理論について明白に區別すべき二つの側面を論ずるのも、もとよりその一つの道程である。

II 二つの資本理論

資本理論の一つの代表は明かにポエーム・バヴェルクにある。それは1870年の主觀主義經濟學の洗禮をうけて生まれた理論であるという點で古典學派に對應する地位をもつと同時に、近代理論の發展と共に内容を整へつゝ今日では大きな一群の學說として成長している。カルドアのいわゆるジェヴォンス—ポエーム—ヴィクセルの理論というものがこれである。この理論の特質はカルドアの整理したところによつておよそ次のように示すことが出来るであろう。³⁾

最終において生産物(output)を生むところの資源(resources)は二つの部分に分れる。一は生産し得ざる資源(non-producible resources)であり、他は再生産し得る資源(reproducible resources)である。土地と労働とは前者に屬し、資本財が後者に屬する。簡單のために資源を労働と資本との二つとしよう。そうすれば經濟の問題は結局において労働と資本の結合から最大の生産物を生み出すことに歸着するであろう。そのためには(1)労働と資本との結合比率を如何に定めるか、(2)労働の維持と資本の再生産との比率を如何に變更するか、(3)最後の完成財特に消費財の流れを最大にするために、純生産物の幾何を保

1) R.F. Harrod, Towards a dynamic economics, 1948, p. 15-16.

2) Howard S. Ellis, editor "A survey of contemporary economics, 1948. その第七章は、しかし、"Economics of labor"である。

3) Nicholas Kaldor, Annual survey of economic theory: The recent controversy on the theory of capital, Econometrica, Vol. 5, No. 3, July, 1937.

留すべきか、が問題となる。これら三つの問題は、何れも資本の大いさの決定に関する問題である。ところで流通経済においては資本の大いさの決定もまた勿論市場における価値関係によって規定せられる。具体的にいえば再生産される資本財の価値は競争のおちつくところその再生産費によって規定されねばならない。そこで資本の理論の重點はこのメカニズムの究明に集中せられる。これもまた完全競争の理論が明かにするように資本財の価値とその再生産費との均等は投資の純収益が利子率に等しい状態によって實現せられる。かくてこの均等をもたらすものは何かを究明してそれが賃銀の運動に外ならぬことを證明したとき、この理論は同時に資本の理論としての役割を果したといえるであろう。すなわち一般に資本財への需要増加があるときにはその価値は騰貴し利子率は下落する。しかしそのことは同時に再生産費の騰貴と賃銀の上昇とを呼び起す。一方資本財の価値は賃銀の上昇の結果下落する。騰貴と下落との中間で賃銀の運動によってもたらされる均衡があるというのがその主張である。⁴⁾

他の一方の考え方は一般に古典學派のそれである。古典學派の資本理論が直接に經濟の發展の問題と深い関係をもっていることは前掲ハロッドの所説によって明白である。スミスからマーシャルに至るまでの英國正統派の資本理論には近代に近づくに従ってその影は薄くなっているものの依然としてかわらぬ基調があった。それは資本の増加と經濟の發展とを常に結びつけて考えようとする考え方、従って又自然的に貯蓄の作用に發展の動力を求めようとする考え方である。この考え方はすでに古くシュムペーターによって批判されている。シュムペーターはいう、「要するに古典學派の説明は靜態的な行動がそれ自ら經濟の與件を變更するという考え方において、發展の説明を經濟的

な環境要因に求めるものである。考察に入るものに五つの環境要因がある。入口増加、資本（定義の相違はしばらく問はず）の増加、生産方法の進歩、産業社會の經濟組織の進歩、及び欲望の發達である。これに従えば經濟的發展はこれらの要因の刺戟によって殆んど自動的に又従って靜態の法則に従って進行する。……勿論あらゆる瞬間において確乎たる均衡状態が存在する。しかし以上の五つの要因はこのような均衡状態の下にある國民經濟の巨體を動かして新しい水準へとかり立てるのである。」⁵⁾

シュムペーターのこの古典學派解釋は一般に經濟の發展についてのことであり、直接に資本の理論についてではない。しかしこれはそのまま資本の理論について妥當する考え方であり、それ故にここにとり上げる重要をもつ。調和的な發展ということはここでそれ程の重要をもたない。若しマルクスの資本論を少くとも理論の立場において古典學派の一つの分派と考えることが出来るとすればその中には明かに調和的でない資本發展の理論がよみとられねばならぬであろう。問題はそこにはなくて、そもそも發展の問題と資本の理論とを結合したところにある。そうしてこの結合の企圖の中にはシュムペーターの批判にもかかわらず、——シュムペーターの批判は一般によく知られているように、このような古典學派的な解釋が一部は現象の表面に眩惑されたものであり、一部は隨伴現象を又一部は結果的現象を原因と誤り解したものであり、要するに以て發展の眞の説明者たり得ないとするにある。——尙極めて重要な意味が残されている。ハロッドが思い切って明示的に掲げた發展の基本方程式⁶⁾

$$GC = S$$

における G は一面シュムペーターの批判をまともにする危険をもちながら、尙古典學派的な資

4) 同じことは input と output との関係としても述べる事が出来る。純生産物の最大はこの觀點からすれば optimum ratio of construction cost to maintenance cost が達成されるような input と output との関係によって限定せられることとなる。この関係を調節するものは迂回の長さである。N. Kaldor, op. cit. p.221-222. この説明の仕方は一層 Böhm に近いといえるであろう。

5) Joseph Schumpeter, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung, 1912, S. 474.

6) R. F. Harrod, Towards a dynamic economics, 1948, p. 77 ff. 但し G (growth) は擴張率、あるいは一定期間の總生産量の増加を總生産量の分數として現わしたものである。C (capital) は始期と終期における存在量の増加差を同期間の生産増加量で除したものである。S (saving) は貯蓄。

本理論の大きな特質を示すものとして注目しなければならぬ。

III 各々の特質

二つの資本理論は勿論その代表的な形について例示を與えたに止まる。ここではこれを詳述する餘裕もないし又恐らく必要もない。われわれの關心はこれら二つの理論の型がそれぞれ如何なる特質をもち相互に如何に關係するかにある。

先ず第一に特徴的な相違として注目されるものは一方が資本の構造、又は資本をその中に加えた經濟の全體の構造をその ABC から考えようとするのに對して、他方が資本の増大に注意を集中している點である。ボエーム・ヴィクセル流の資本理論が經濟の全構造を特に資本の量という立場から考察しようという立場は、すでにボエームの生存基本説において明白である。生存基本説は周知のようにそれ自身としては極めて抽象的な考え方であり、その抽象性の故に反って種々の異説をとり容れる餘地のあるものである。けれども生存基本の存在量を迂回の期間に結合して考え、そこから國民經濟にとって最も有利な迂回の期間と最大の利子(實は平均利潤率)を導き出そうという考え方そのものは、資本の問題を始めから經濟の構造と共に考えればならぬとする主張が極めて濃厚に示されている。ボエームにつづく學者にとってこの考え方の展開には多少の變化がある。直接にボエームをついでこれを流通經濟の現實に一步近づけたといわれるヴィクセルにおいてはこの考え方は、それがまさに流通經濟の價格形成過程の中におかれたという意味において一步後退したかの感を與えるであろう。けれどもそれは後のハイエクにおいて再び極めて明白に示されている。

ハイエクの「資本の純粹理論」(1941年)は最近の資本理論においては比較的小さな評價しかうけていないように見える。例えばハレーの評價がそれである。⁷⁾ しかしハイエクがこの著において最も力説したところは資本の理論の第一の類型を代表するものとして一層大きな注目を拂うに値する。すなわちこの書の前半において彼は資本を同次的な量とする一般の考え方を極力排斥すると共

に、後半において構造としての資本の分析を展開した。それは他の言葉を以てすれば資本の無限の代替性を否定して、かえってその補完性を強調したことに等しいのであるが、その所説の中にわれわれは最もよくボエーム理論の特質をさぐることが出来る。試みにハイエクが英米型の資本理論とオーストリア學派の資本理論との相違として並記するところの若干項目を比較せよ。

- A₁ 重點は全面的に固定資本の役割の上におかれ、あたかも資本は極めて耐久財のみから成立しているように考えられている。
- B₁ 重點は生産過程の連続期間から生ずる流動資本の役割の上におかれている。その理由はこれが全資本の若干の特質を最も明白に示すからである。
- A₂ 資本財という言葉は耐久財のために留保される。それらは非連続的に又週期的にのみ代置を要するものとして取扱われる。
- B₂ 非永久性ということは全資本財の特徴的な性質として考えられている。従って力點は全資本の不斷の再生産の必要の上におかれる。
- A₃ 資本財の供給は比較的短期間に與えられるものと推定されている。
- B₃ 資本財のストックはたえず消耗され従ってたえず再生産されるものと考えられている。
- A₄ より大なる資本に對する要求は主として生産の lateral expansion すなわち既に存在する種類の設備の單なる重複化によって起るものと考えられている。
- B₄ 附加資本は生産技術(すなわち個々の資源の使用方法)の變化を可能にするために必要とされるものと考えられている。従ってそれは生産の構造の longitudinal changes に導くものである。

これはハイエクが列挙する十個の相違の中ここに直接に關係のある四個のものをとり出して示したものにすぎぬ。⁸⁾ しかしこの比較によって第一の理論が第二の理論に對してもつ特色は最も明

7) 「ある意味においてこの書物(Hayek's The pure theory of capital)はこの review が主として關係するところからは、やや舊時代に屬するものということが出来よう。従ってこの極めて重要な書物についてこれ以上の注意を拂わなくても差支がない。」 Bernard F. Haley, "Value and Distribution" in "A survey of contemporary economics" ed. by H. S. Ellis, 1948, p. 39.

8) F. A. Hayek, The pure theory of capital, 1941, pp. 47-8.

白に示されている。ハイエクが英米流の資本理論と名づけるものが先にわれわれの古典學派的と名づけたものに當り、ハイエクのオーストリア學派と名づけたものがわれわれのボーム理論と名づけたものに當ることは改めて指摘するまでもあるまい。⁹⁾

この比較はたまたま第二の理論のタイプについて特徴的なものをも同時に示してくれる。古典學派的英米流の資本理論について第一に挙げられる特質はそれが資本の増大に注意を集中することにあるであろう。資本の供給を短期的のものと考えたり、資本の需要に重点をおいてその不斷の更新乃至代置にあまり重要をおかなかつたり、固定資本財に重点をおいて資本一般を看過したり——これらすべての表現は勿論比較のための誇張をふくんでいる——およそこれらの諸點は何れも資本をその増殖過程について眺めて資本をふくむ全經濟の構成を第二次的に考えることから生ずる。個々の資本増殖過程は勿論ひいて全經濟の構造の變化にいたる。固定資本財の増加過程は全資本の再生産をはなれて問題とはなし難い。しかしあえて抽象的に問題を全經濟の面に擴大することなく、むしろ實踐的に個々の具體的過程に限定すること、このことの中には一見したところよりは遙かに大きな資本理論への態度の相違がうかがわれるのである。

第一の相違はかくて構造を主とする資本理論と増大を主とする資本理論との相違となる。この相違が資本理論そのものにとって如何なる意義をもつか。われわれはこれにつづく第二の相違として資本理論における貨幣の考え方に論及しよう。この場合、資本の理論にとって貨幣の存在が如何に重要な役割をもつかは認められた前提である。實際資本と貨幣との密接な關係はそもそも資本の概念の中に如何に深く貨幣が入りこんでいるかを考えることによってすでに明白である。それは單に定義の問題ではない。われわれが一度資本の現實作用に立入るとき、そこでの現象は現象的には悉く貨幣現象である。資本の理論の中核をなす利潤

にしても利子にしても貨幣形態を外にしては把握すること殆んど不可能である。資本と貨幣との結合をこのようにして前提するとき資本理論における以上の特徴的な相違はおよそ如何なる形をとって現われるか。

第一の資本理論は本質的には貨幣の役割を第二次的に見る考え方に結びつき、第二の資本理論は逆に貨幣の役割に大きな意義を認めることとなる。第二次的な役割をかりにヴェールとしよう。さすれば經濟構成的な資本理論は本質的には貨幣ヴェール觀をもつものといえよう。ボームやハイエクの資本理論が貨幣の特定の理論をもつことなしに、いわば real term において展開し得ることは容易に看取し得るところであろう。勿論このことはボーム、ヴィクセル流の資本理論に貨幣の積極理論をいれる餘地がないというのではない。現にすでに指摘した如くヴィクセルの業績はボームの抽象的な資本理論を流通經濟の市場理論に移植した點にあり、この移植において貨幣の役割は到底分析の目を逃れる能わざるものであつた。好んで實質分析に頼ろうとするハイエクにおいても貨幣の役割は決して看過されていない。例えば其著「價格と生産」(第6版1948年)における景氣變動論の構想は、實質的に均衡にある經濟が附加的信用に基く貨幣によって攪亂される過程から生れたものである。中立貨幣の構想がそれ自體貨幣の積極作用を輕視するものとはいいい得ない。否、例えばヴィーン・クラウディのいうところによればオーストリア學派の資本理論の特色は第一にはその貨幣的理論としての展開にあるというべきであろう。¹⁰⁾ しかしこれら一切の論證はボーム型の資本理論が本來非貨幣的なものとして成立することを妨げない。この型の理論の特質はむしろそれが如何に貨幣的な形をとろうとも尙依然として本質的な經濟の構造の理論としての意味をもつところにある。そしてそれはこの型の理論が常に資本を資源と生産物との全體の構造の中に、あるいは兩者をつなぐものとして實質的にとらえようとする志向から生れるものである。

9) 資本理論における二つの考え方の相違を英米流とオーストリア學派流とに分けることは今日の理論の狀態からは、しかし、適當ではない。

10) F. Wien-Claudi, *Austrian theories of capital, interest, and the trade-cycle*, 1936.

これに反して第二の型の増殖理論においては貨幣的形態は本來は本質的なもののように見える。というのは資本をその増大の過程において考える限り現實の具體的な市場過程は到底無視することが出来ず、これを現實の具體的過程について見る限り貨幣はまさに注目の焦點とならねばならぬからである。われわれはその原型をアダム・スミスに見出す。スミスにおいて資本の概念は營利の目的と深く結びついていた。營利のための財産が資本であり、それはこの目的と一應きり離されたストックとは別個のものであった。しかしここではこの區別は重要ではない。stock においてもまたそれよりも狭い capital においても貨幣は常に獨立にその一項目として数えられている。スミスのこのような項目の數え方は今日の分析から見れば甚だ不備である。しかしこの常識的な項目の數え方の中には資本と貨幣との具體的な結びつきが極めて率直に示されているといつてよいであろう。この場合にもまた現實の理論の展開は一見明かに別の道を辿っている。古典學派の貨幣觀は長い間ヴェール觀として特色づけられて來た。これを打破して貨幣に獨立の地位を與えたのはむしろケインズであるとされることも今日の常識である。この點では英米流の資本理論における貨幣の地位はむしろ中立貨幣の思想に近いものがあつたとさえいえるであろう。しかし古典學派をつぐものの中にはこのような考え方に對して常に根強い反對の空氣のあつたことも忘れられてはならない。ケインズは貨幣の「一般理論」を説くことによって果して古典學派の傳統を全く更新したのであるか。古典學派にあつたものを再發見したにすぎぬのであろうか。ここには少くとも見解の相違をいれる餘地があるであろう。かりに後の見解がとられるとしたら、そこでの資本理論が全く貨幣的な、あるいはあまりにも貨幣的な色彩をもつことについてははや何の説明をも必要としない。ケインズを解してここまで行くことは恐らく行きすぎであろう。われわれはケインズの理論が第二の資本理論の展開の一つの例として引用し得るといふに止めておこう。

二つの理論についてわれわれの言いたいのはこのような形式的な相違ではない。この特徴的な對

立から出て來る具體的な事物の考え方の相違である。それこそが統一的な資本理論のために眞に必要なものであろう。そしてこの相違は更に投資について貯蓄について又利子についてこれを求めることが出来る。しかしこの點についての詳細な展開は別の機會にゆずらねばならぬ。以上に明かになし得たところから何が生れるか。結論を急がねばならぬ。

IV 展 望

見ているものは一つの資本的現象である。あるいは資本の現象がその關係する一切の要因との關係をふくめていけば經濟現象そのものである。在るものは二つの資本理論である。一は資本を中心として經濟の全體の構造とその變化に注意をあつめ、一は發展に焦點をすえて資本の増殖過程を問題とする。一は貨幣を一つの攪亂要因と考え、他はこれを一般的な基本動因と見る。とに角二つのものである。しからば來るべきものは當然二つの理論の一つのものへの統合でなければならぬ。この統合はすでに出來ているという見解もあるであろう。すでに述べたようにわれわれの分類はたしかに一つの形式的な行きすぎをふくんでいる。現に與えられている理論體系はボームやケインズの如き旗幟鮮明のものを除いて、¹¹⁾ 多くは二つの理論のそれぞれの要因をふくんでいる。このことはまた兩者の相違點の第二、すなわち資本理論における貨幣の地位の説明においても一部關説したところであつた。しかし二つの理論の要素が混在しているというだけで統一がすでに出來上つていゝとは云えない。むしろこの混在が理論の混迷の原因であると見られるところにわれわれの分析の出發點があつた筈である。

統一の可能性を探るためには先ず以て兩者の特質を明かにしなければならぬ。結局において構成的な資本の理論は一層現實的な發展の理論をとり入れて自らを豊富にすることが必要であるし、現

11) 兩者の明かな對立はケインズがオーストリア學派の資本理論における迂回期間の概念を排斥し「資本形成は生産期間の延長の存在する場合に起るといふような敘述は問題を大して發展さすものではない」(ケインズ「一般理論」邦譯 96 頁) といふに至つて極まる。

實的發展的な理論は構成的な理論によってその體系を整序せられねばならぬのであるが、これが如何にして可能であるかを明かにする第一の前提はそれぞれの理論をこの可能性について再吟味することから始められねばならぬ。

ポエームの理論を現實の利子理論にまでひきおろして來る努力はすでにヴィクセルによって企圖された。近代資本理論の始めがヴィクセルにまで遡るとされるにはたしかに理由がある。そこでは資本が經濟の全過程において占める地位の確定に問題が集中せられ、資本の大いさと利子率利潤率との關係が明かにせられた。資本の問題を經濟の全過程の中にとり入れるためにレオン・ワルラスの一般均衡理論がその基盤として用いられたことも周知の事實である。けれどもこの方向によって大きな發展の問題をとらえることは必ずしも成功していない。問題は發展の現象をつよく均衡の圖式の中にとり入れることに集中せられて發展をその本來の姿において捕えることから遠ざかった憾が多かった。更に近代に屬する資本理論が一層狭く理論の視野を限定してその中での整備に力を集中していることはすでに指摘した如くである。

これに對して強く發展の現實の問題をとらえんとする傾向は、あるいは貯蓄の現實形態に、あるいは投資の現實の誘因に、その注意をむけてこれを全體的な圖式においてとらえようとしなない。恐らくその最も代表的なものはシュムペーターの資本理論であろう。それは動機から過程から一切が循環のそれとは異なるものとされる。いわば二元論的立場にあって經濟の全體を眺めようとするものである。一方に嚴密な靜態の理論をもつシュムペーターにあってはこの對立は他の學說の何れよりも明白に現われている。しかしその程度の相違はしばらく別としておよそ發展の現實過程に即し

て資本の増加を問題としようとする一群の人々にとっては理論はしばしば經驗そのままの非合理性をかついで來るのである。

二つの理論は如何にして一つのものになり得るか。形式的には第一型の理論を全く形式的に發展の形におきかえることが出来るであろう。單純再生産から擴張再生産への圖式の變更がその一つの場合である。比較靜態の考え方は更に一般的な例であろう。兩者に共通な要因はそれが經驗からの一つの歸結をなしているという點にある。しかし若しこのような形式的な擴大が經驗に直接の模型をもととするならば、そこでは經驗における發展の一層現實的な動力が問題とならざるを得ないであろう。シュムペーターは端的にこれをとらえて企業者とした。しかしその限りにおいて構成の基本理論から離れた。これを離れることなしに發展をとこうとする従來の一切の企圖が、結局において發展をとくに足りない Milieu Theorie に外ならぬことを知ったからである。若し具體的な發展の動力を全體の構成圖式の中にとり入れることが全く出来ないとすれば、發展的な資本理論は遂に Milieu Theorie の域を脱することは出来ないのである。しかし兩者をつなぐ途は果して全く残されていないであろうか。いないと斷定することは勿論早計であり、實際には動態の理論が徐々としてではあるが、その課題の克服のために進んでいる。資本の理論の中にある二つの側面を特に二つの理論としてとり上げたのもこの途への一つの接近に外ならない。¹²⁾

12) この一文は昭和 24 年 10 月 9 日、日本經濟學會における報告の要旨である。この報告に際して討論の形において御教示を得た會員諸氏、就中、鹽野谷九十九、安井琢磨、坂本彌三郎、宮田喜代藏、杉本榮一、中谷實の諸教授に感謝の意を表す。